OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	診断の社会学――「論争中の病」の当事者における正統化と希望のポリティクス
Author(s)	野島, 那津子
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69293
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　野島　那津子　）	
論文題名	診断の社会学 ――「論争中の病」の当事者における正統化と希望のポリティクス――

論文内容の要旨

「論争中の病」とは、生物医学的エビデンスを欠いているために、病気の実在性に疑義が呈され、患いの正統化をめぐって医療専門家と患者、医療専門家同士、あるいは患者をめぐる周囲の人びとや世論も加わって「論争」が生じている病を指す。本論文は、こうした論争中の病の診断が当事者におよぼす影響を明らかにすることを通じて、今日わたしたちが生物医学と取り結びうる関係の仕方を理解するためのパースペクティヴを提示することを目的として書かれた。論文はⅢ部７章で構成される。第Ⅰ部（１章・２章）では、問題の所在と研究の視座を明らかにし、第Ⅱ部（３章・４章・５章）では、論争中の病を患う人びとの語りを用いた実証研究を行った。そして、第Ⅲ部（７章・終章）では、第Ⅱ部で得られた成果の総合的な考察を行い、医療とのかかわり方を理解するための新たなパースペクティヴを提示した。各章の要旨は以下の通りである。

第１章では、これまでの医療社会学の分析対象および分析視角の変容の検討を通じて、論争中の病が医療社会学のアポリアであることを指摘した。そして、論争中の病に関する先行研究の検討から、当事者はとりわけ診断をめぐって深刻な問題を抱えていることを確認した。

第２章では、医療社会学における診断の布置を確認した上で、実証研究において診断のどのような面にアプローチすべきかに関して、「診断の社会学」の分析視角を整理・検討し、本論文の着眼点を提示した。

第３章では、不十分な医療化のミクロ分析というアプローチのもと、痙攣性発声障害（SD）を患う人びとの語りを用いて、当事者が直面する困難ならびに診断の影響を検討した。その結果、診断以前の当事者は、他者に患いを説明できないことでさまざまな困難を抱えていたが、病名診断によって、他者に対して患いを説得的に説明する可能性が開かれることが明らかとなった。このSDの事例から病名診断は、患いを社会化するポジティヴな効果を確認できた。

第４章では、論争中の病の代表格とされる筋痛性脳脊髄炎／慢性疲労症候群（ME/CFS）を患う人びとの語りを用いて、彼らの病気行動の分析を行った。その結果、ME/CFSを患う人びとの病気行動は複雑化せざるを得ないとともに、疾患の存在を信じない周囲の人びとによって依存的患者役割を遂行できないことが明らかとなった。そのため、病者は「活動的な患者」となって必要なケアやサポートを受けられるように行動する「自立的患者役割段階」を自ら準備し、実践しなければならないことを指摘した。

第５章では、ME/CFSおよび線維筋痛症（FM）を患う人びとの語りを用いて、当事者における病名診断の影響を検討した。分析の結果、「診断の効果」として、安心感の獲得、患い／苦しみの正統化、自責の念からの解放が、「診断の限界」として、患いの矮小化ならびに病気の存在そのものの否定が見出された。前者は、当事者が診断時点で享受していたのに対し、後者は、診断後の他者とのかかわりの中で生じていた。つまり、ME/CFS・FMの当事者の患いは、診断によっていったんは正統化されるものの、疾患の存在を信じない周囲から診断後に脱正統化されるのである。このように他者との間で病名が病気の不在をあらわす事態を、ここでは「診断のパラドックス」として提示した。

以上の議論の総合的な考察として、第６章では、当事者が診断とのかかわりの中で参与することになる正統化と希望をめぐるポリティクスを検討した。第５章で論じたように、論争中の病は医師から正統化されても、客観的証拠が存在しないため、周囲から容易に脱正統化され得る。そのため、論争中の病の正統化は、周囲の人びとによる脱正統化とトレードオフの関係にあることが示唆された。また、当事者は自分たちの治癒や疾患の制度化だけでなく、来るべき患者が自分たちよりも良い状態たらんと望んでいることを指摘した。それは、生物学的シチズンシップを同じくする者への「倫理的先駆者」としての態度であり、生物医学への希望が当事者の生を駆動していることを確認した。

終章では、論文全体の議論から導出される知見として「疾患」と「病い」の不可分性を提示した。わたしたちが現にこうである生は「生物学的な思考様式」を中心に形づくられている。故に、わたしたちと生物医学が取り結びうる関係を理解するためには、「病い」という曖昧模糊とした社会学の安全地帯ではなく、生物学的なものと社会的なものと個別的なものとが交差し、すれ違い、論争を生み出す場としての診断ならびに疾患に照準する必要性を提起した。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（野島那津子）			
	（職）		氏　名
論文審査担当者	主 査	教授	山中浩司
	副 査	教授	斉藤弥生
	副 査	教授	村上靖彦

論文審査の結果の要旨

野島那津子の学位申請論文「診断の社会学」は、現在医療社会学においてもっともホットなテーマの１つであるいわゆる「論争中の病contested illness」をめぐる、社会的問題状況を当事者への綿密な聞き取り調査から明らかにした労作である。医療社会学においては、1990年代後半以降、従来の医療化論の枠組みでは医療化の試みに失敗したと言われるいくつかの疾患群について、主として当事者への聞き取り調査などから、当事者が抱える深刻な困難が明らかとなり、国際的にも大きな研究潮流を形成している。国内においては本格的な質的研究としては本論文がおそらく最初のものとなると思われる。野島論文は、痙攣性発生障害、慢性疲労症候群、線維筋痛症という代表的な「論争中の病」をとりあげ、合計４６名の患者の聞き取り調査を行い、彼らが経験する社会的世界の周到な分析を行っている。論文の理論的構成としては、近年注目されている「診断の社会学」における診断の社会的位置付けや診断の社会的機能の分析に焦点をおいている。この枠組みは、従来慢性疾患の質的研究の主流をなしてきた「病の語り」研究が、患者の主観的経験を分析の中心にするのに対して、「病illness」と「疾患disease」の間に生じるダイナミックな関係に注目するものである。こうした点から、野島論文は医療社会学の新しい潮流を代表する研究の一つとして位置づけられる。野島論文の焦点は、「論争中の病」を患う人々において、診断がどのような主観的、社会的意味をもつのかを問うことにある。痙攣性発生障害においては、発話における困難は、多くの場合は社会的説明を欠き、当事者にはさまざまな不適切な反応が投げかけられるが、しかし、診断によってこうした問題は一定程度緩和されることが明らかとなり、これを著者は「患いの社会化」と呼び、従来の医療化論で主張された医療化によって個人の社会問題の「個人化」が生じるという議論とは逆の結論を導いている。慢性疲労症候群の調査においては、一般的疾患において見られる病人役割の取得が困難であるため、当事者は依存的受動的患者役割を遂行できず、能動的な「自立的患者役割」を実践する必要に迫られることが明らかとなる。こうした行動は、従来の一般慢性疾患においては疾病利得に該当する、病気行動を誘引する要素と見なされていたが、本論文では、こうした行動が、「患いの正当性」の獲得するためにやむを得ず強制される活動と位置づけられる。この点も、従来の病気行動論では見逃されていた論点の一つである。最後に線維筋痛症の事例において著者は、当事者の困難を社会的に正当化すべき「診断」が、むしろ「疑わしい疾患」の証明というパラドキシカルな効果をもつことを示している。

以上の点から、野島論文は、1990年代までの医療社会学の主要なパラダイムである、病人役割論、医療化論、病の語り研究のいずれに対してもユニークな修正を迫る内容を含んでおり、国際的にもきわめて重要な貢献となっていると言える。本論文の一部は、４本の独立の論文としてすでに公表されており、うち３編は国内の有力な学術雑誌の査読論文であり、１編は、2016年度の保健医療社会学会の年間最優秀論文として園田賞を受賞している。国内においては、この分野のパイオニア研究者の一人と称して過言ではない。

以上の点から、審査員は、本論文を博士（人間科学）の学位に十分な条件を満たしていると判断した。